九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヴァンドオム廣場事件の考察

長，壽吉

https://doi.org/10.15017/2339050

出版情報：史淵. 40, pp.1-15, 1949-03-20. 九州大学法文学部
バージョン：
権利関係：

ヴァンドオム廣場事件の考察

長　壽　吉

一八七一年パリ・コンミューンの、主要な役員であつたアルトゥル・アルノオルは、亡命の後、ブリュクセルに於て、事件の經過とこれに就ての意見とを公にした。(社會主義者小論冊子のうち。ブリュクセルの社會主義書店アンリ・キストマケルス刊、一八七八年。アンリ・キストマケルスは、ベルギイに於ける同主義者中に、文筆を以て盛名のあつた人である)。(Histoire populaire et parlementaire de la Commune de Paris. Par Arthur Arnould, Membre de la Commune de Paris. T. 1—8. 1878. Petit Bibliothèque Socialiste. Bruxelle-Henri Kistnaeckers)

この『パリ・コンミューンの通俗民間史並代議會史』は、パリ・コンミューンから八年も經過した後ににされたもので、コンミューン勢力の彈壓からほとぼりさめた頃であることが、まづ注目され、次に著者が回想の時間をもつたことが注目される。この點並びに著者がコンミューン一員であつたことが、この書が史料として重要であること、他のコンミューン同時の諸著作或はコンミューン經驗者の著作に勝るものであり、且つその性質を殊にするものであることが諒解される。(この書に關して、フランス・ベルギイ兩政府の諒解

に由つて初版が沒收され、現存は訂正版であるといふ說がある。）

何人もこの書を讀んで、その冷靜な敍述と自省的な主張とを感じ、著者が充分な回想の時間をもつたことを知るであらう。殊に、その第一卷にあるコンミューン運動の理由の說明は、頗る溫健で、何等の冗長も見出されず、讀者をむしろコンミューン運動に對する歷史的回顧の上の、一種の同情をも感ずるに至るであらう。

それよりも、私がこの書の讀後に得た考察は、一八七一年パリ・コンミューンが、唯その事實を簡單に一括して、主義運動或は擾亂として觀られないこと、むしろ觀るべからざることである。

一八七一年パリ・コンミューンは、その當初の事實の由來と、その後期の反抗暴動の所以とを異にしてゐる。當初は、ナポレオン帝政末期の議會員組成の關係、オリヴィエ內閣の施政方針、また勞働者英國派遣の事實等に傳統し、セダン敗戰と、ドイツ軍のパリ進擊と、ボルドオ新政府及びその後のヴェルサイユ政府等に由來するものであり、後期は、むしろコンミューン自體の分裂並にその計畫の齟齬に所以をもつものである。

故に私は、一八七一年パリ・コンミューンの觀察に際して、この二つを性質を異にする事件として區別し、唯、一括總稱することをさけたく思ふ。從つてこの區別のはじめとして、まづ當初の事態が、無秩序の暴動に發展した機會を、一八七一年三月十八日ヴアンドオム廣場事件と名づけ、特にその由來について見ることとする。蓋し、この一八七一年パリ・コンミューン全事件は、後期の暴動及びその鎭壓については却つて多くの意義をもつものでなく、むしろヴアンドオム廣場事件に發展する由來に重要さがあり、全事件の性質及

びその影響の觀察が、こゝに於て成されると思はれるからである。

○

凡そこれら史上擾亂の如きが、感覺の上に依據して、その偶然性的發展を有したことは、過去にその例が乏しくない。二月革命を顧みるならば、街頭風説と二月の寒雨の刺戟とが、市民ことに革命運動の計畫には何等の關係をもたなかつた勞働者等の、感覺を興奮させたことは、この革命由來の必然性的發展に併せて、常に參照すべきものである。二月革命の必然性に對して、偶然性的部分の多いことが説かれる七月革命に關しては、一層である。サンク・オルドナンスの一つ一つを觀る場合に、私はそれが、既に復興王朝政治の末期に、殆んど悉く既定事實として認められてゐたものであつたのに、感覺の問題は、王朝初期の白色恐怖とクウデタア回顧との上に、擴げられてゐたことを見る。フランス大革命でさへも、七月十二日夜の市廳の突然たる打鐘が、市民に與へた影響を、無視することが出來ないと思はれる。

○

アルノオルは、パリ市民の感覺が、孤立無援全然の低迷躊躇のうちに、著しい心情をもつた事を記してゐる。「數個月を經過する間に、パリはフランスの他の部分とは隔絶し、それ自身だけで處理し、それ自身だけの力で殆んど盡く行動し、斯くてパリは、頗る多くの憂慮と經驗と熟考とのうちに、生活したのである。故に市民の感覺は全く特殊で、それが政治と社會との批判を通じて、大きな興奮を與へたのである。

從つて、孤立がパリ市民の自負と傳統の回顧とに與へた特殊異常の心理は、アルノオルの所謂「絶對的華

視」を、過去のあらゆる政治形態と現前の事態との上に、起さしめたものである。換言すれば、政治的な完全否定、むしろ虚無的な思想を市民にいだかしめたのである。この特殊異常の心理は、主義の宣傳にもまし、また暴擧の煽動にもまして、ヴァンドオム廣場事件の由來となつた。

前述の如く、一八七一年パリ・コンミューンがその前後に於て事件の性質を異にし、そしてヴァンドオム廣場事件が、その間に於て事件の發展に重要なる意義を有つとすれば、この特殊異常の心理に關する注意は、全體の事件の觀察に必要である。偶然性的な事件發展の觀察は、こゝに由來するのである。

「從來の二つの政體、即ち王政と、寡人共和政或はブルジョア共和政には、もはや何等希望すべきものがない。唯一縷の期待は、後者の政體の利益が、激烈な變革でなくして、施設の平穩秩序的な手段に由つて、國民の手にその正常の地位を得さしめることが出來たかもしれぬといふことであつた。」と言ひ、そして最も重要なことは、「幾箇月間、パリ市民は、それを期待してゐたのである」と言ふ。

○

この孤立の間に於ける市民の「期待」は、事實上空虚となることが次第に明瞭であつた。ジョルジ・モランの記すところでは、「經濟上の關係に於て、コンミューンは多くの困惑をもたねばならなかつた。パリをつた法律上の政府は、これに拘はらず、資金を運び去つて、總ての從業者にその仕事などを皆混亂させた。交通、通信、稅務、直接間接の收入等々、悉く財政上の機關施設はパリから離れ去つたのである。」（ジョルジ・モラン『ラ・コンミューン史批判』一八七一年刊、パリ市國際書店、ブリュクセル市ラクロア及びフェ

ルブウクホーフェン出版、及びライプチヒ市リヴルネ書店）（Georges Morin, Histoire critique de la Commune, Par.1871: chap. Ⅱ.）

この記事は、前述の一八七一年パリ・コンミューン事件の後半の由來として參照すべきものでもあるが、同時に、前半のヴァンドオム廣場事件の由來、殊に前述の特殊異常の心理、從つてその無秩序な行動の發展に參照すべきものである。パリは其の自負する優越を、ボルドオ政府に由つて犯された結果の、道義的な壓低を感じてゐたのみでなく、また實にこのやうな事實上の痙攣（ティレユマン）をも經驗した。それが政治上社會上の特殊の批判の觀念を普及したことは、想像に難くない。

アルノオルは一八三〇年及び一八五一年の變革を回顧して批判し、この二つの經驗が、皆期待に反逆した欺瞞であつたことを述べ、現前の事態は、まさに同樣の經過を見る恐れがあると稱し、次に政治上社會上のコンミューン主張を記してゐる。

この主張は、全フランス國の地方自治體たるコンミューンの聯合である。「一個の權力」は、權力の集中から平等權の破壞を伴ふに至るものであり、これに對する國民多數の權力の保持には、地方自治體の全國的聯合以外に方法がない、と言ひ、この目的を達するに必要ならば、社會革命を行ふべしと言ひ、この計畫は、既に長い間にその必要が感ぜられ、そして既に國民の間に萠芽を有したものであるが、經驗と考量とは、その心然を確信させるに至つた、と言ふ。

この經驗と考量といふものは、長期の防禦の苦難であり、しかもそれにも拘はらざるボルドオ政府のパリ

放棄である。そしてアルノオルに言はせれば、今やパリは三つの方途の、いづれかを選ばざるを得ざる事態に立ち到つたのである。即ちその一は、唯茫然として自殺することである。その二は、大規模な擾亂を起すことである。然しこの二つは、卑怯でもあり、また何人もその不成功を信ぜざるものはないのである。從つて、パリは第三の方法を選ばざるを得ない。それは、「現在の問題を解決する唯一の手段として、コンミューン自治の大運動をはじめることである。國民にその正確な權力の部分を與へ、各々の自然的團體の總てのものに、正統な政治活動の地位を與へることである。」

ついでアルノオルは、「鬪爭」は一つの「狂氣じみた事」であるが、それが高き目的をもち、將來に有利ならばやむを得ずと言ひ、「吾々はパリ・コンミューンの完全自治を要求するが、この意志をフランスの他所に押しつけるものではない。吾々はパリの城壁内に於ける、行政司法警備軍事等の、當然吾々に屬すべきものだけの權利を要求し、しかも決してフランス全國との分離を欲しない。吾々はフランスの他のコンミューンが、吾々の例にならうことを約束し、そして猶それら總てが、吾々と聯盟する全組織を要求する」と記してゐる。

○

要するに所謂「經驗と考量」が、パリの孤立無援そして外敵の包圍に由る外界との隔絶、及び首府としての優越の放棄などの、環境から起させた特殊異常の心理は、歴史の回顧に立つた批判を通じて、パリ・コンミューンの形態を、全フランスに擴充する所謂「第三の方途」として、自治運動に發展した。即ちコンミュ

ーン自治體の聯合體たるフランス國民の國家を樹立する思想である。

エドガ・キネの歴史觀が、この政治形態の理想に影響するところ多かつた事は考へられる。例へば『パリ・コンミューンのもとに於て』の著者ウィルヘルム・ラウザアの如きは、これを明記してゐる。キネの一八六五年の革命史、ことに一八六九年の革命史批判などが、中世研究からのコンミューン自治體を說いて、テーヌなどの史論に脈流してゐることは明かであるが、然し、斯ういふ理論に立脚したものが當初のコンミューン思想であつたかは疑はしい。(Unter der Pariser Commune. Ein Tagebuch von Wilhelm Lauser. Lpz. 1878.)

ヴァンドオム廣場事件の後の四月十九日のコンミューン宣言には、前記アルノオルの主張の通りに書いてあるが、唯これに併せて、別に新たに、廣場事件以後の思想の變化、即ち廣場事件以前の思想の性質を知るに足るものは、同宣言の終りに、「權力と資産との普遍化」を說いてゐることである。(アルノオル著前掲同書、及びそれよりは詳しく全文を採用してあるメエルヘイム『一八七一年のパリ・コンミューン史』の附錄參照文獻。)(L. von Meerheimb, Geschichte der Pariser Commune. Berl. 1880.)

前記ジョルジ・モランの著書に記してある。「パリに於て中央委員會は、彼等の政治組織の純正を證明し、コンミューンといふ語はミュニシパリテと同意語であることを、信じさせるやう努力しはじめたのである。文法的には恐らくこれは眞實その通りである。歴史的にはこれは虛言に過ぎない。吾等は故に原始的なコンミューンは、ある自己發生の社會的政治的制度であると觀る。それに於ては、一つのコンミューンは他のコ

ンミューンに對し獨立してゐることが確知されるもので、事實上、中世封建制度からの產出に過ぎない。分散と分裂つまり無能力といふこと以外にはない。一七九三年のコンミューン革命は、本來過渡的な一時の制度で、外界の事情に支配されたもの、從つて消滅すべきものであつた。何人も、その時までかういふ政治組織をとり上げようとも考へず、またその後それが再來することを希望して主張し賞揚したことはない。」

一七八九年の大革命時に憲法議會の主張してゐたものは、恐らくこの聯治の思想であつたと思はれる。それが國民公會の頃に、變化した統一的なコンミューン組織の理想に發展した。それと同じやうに、ヴアンドオム廣場事件の前後に於ても、コンミューン思想は相違してゐる。アルノオルの記述に於ける主張は、むしろヴアンドオム廣場事件の以前のものであることが感ぜられる。從つてそれはミュニシパリテの主張であり、「權力と資產との普遍化」といふ類のコンミューン主張とは、違つてゐたものと考へられる。

アルノオルが四月十九日宣言を要約してゐること、メェルヘイムの書の附錄參照文獻にある同宣言のうち、右の「權力と資產との普遍化」を詳細に記して敷衍し、「政治的統一」が、地方の自主の總ての統合、また一般的目的に合致する個人的活動にあることを言ひ、更に三月十八日の民衆發意に由るコンミューン革命が、經驗的積極的科學的政治の新時期を作ることなどを言ふことなどは、三月十八日前後の形勢の變化を推定させるものである。（Meerheimb, ibid.）

○

これらの考察は、普通に知られてゐる一八七一年パリ・コンミューンがヴアンドオム廣場事件を境として、

その前後に性質を異にした事件であつたこと、後期が普通に知られてゐるものの性質であることを考へさせる。從つてヴァンドオム廣場事件以前のパリに於ける特殊異常の住民の心理から、この事件の發生が、偶然性的傾向を多く有したことをも考へさせる。これについては、メエルヘイムの書頁三三に、三月十八日ティエールのパリに對する布告に關する市民の不滿興奮、パリ守備軍内の動搖、既に十日以前からのドイツ軍の南郊占據に對する市民の絶望の感など、全く困惑の形勢が詳にされてあるのに、參照されうるであらう。リッサガレイ著書にも同樣參照すべきものがある。（リッサガレイ『一八七一年コンミューンの歴史』第三節「三月十八日」）。(Lissagaray: Geschichte der Commune von 1871. deut. Ausg. Braunschweig, 18

○

マドレエヌ寺院の司祭ラマズウの『パリ・コンミューン＝その發端と終息とに關する歴史文獻』（一八七一年版、翌年ドイツ譯版マインツ刊行）は、上述の事情に關する貴重な文獻である。

もつともこの書には、オルレアン僧正フェリス・デュパンルウの序文書翰があり、著者の地位を通しての觀察から、おのづから獨特の傾向をもつことはやむを得ないが、マドレエヌ寺院から程近いヴァンドオム廣場の出來事について、著者が事實上に極めて近く觀察し、また遂にコンミューン政府に禁錮されるに至つた經緯、ならびに當時の市街、市民、及びコンミューン軍の狀態につき、頗る細かい記述である。(Lamazou, La Place Vendôme et la Roquette" deut Übers. Die Pariser Commune. Historische Actenstu ueber deren Anfang und Ende. Mit einem Briefe von Felix Dupanloup Bischof von Orl

Mainz 1872.)

司祭が事件の後三月二十一日、ヴアンドオム廣場へ行く途上、護衛の兵士との會話は甚だ興味が深い。兵士は言ふ。「誰よりも平和と秩序とを愛する尊敬すべき人々の居住する區域を、なぜ嚴重に監視するかといふ御質問に對し、余は全然何故かを知らない。余はバアシイから來たのだが、只人々は愛國的使命に進軍せよと勸告するので、何心なく出て來た。バアシイでは實に平穩であつたが、　こゝでも別に何の事もないだ。余には一切諒解出來ない。人は只々進軍せよと命令する。それだから、吾々は只進軍しなければならない。」

同樣な事態は、カテュル・メンデス著『コンミューンの七十三日。一八七一年三月十八日より五月二十九日。』の卷頭にも記してある。　この著者は三月十八日朝四時に、進軍の騷ぎで眼を覺たところから記し、前述ラウザアの著書とともに、日記體の有益な史料である。街上に出た彼は、兵士に尋ねた。「君等は何處に進軍するのか。」兵士は、「僕等は誰もそれを知つてゐない」と答へる。他の兵士は、「何んだかモンマルトルへ行くやうだ。」とメンデスは記してゐる。(Catulle Mendès, Die dreiundsiebzig Tage der Commune Vom 18. Maerz bis 29. Mai 1871. deut. 1871.)

これらの例證が何を意味するかは、おのづから明かであらう。コンミューン政治の能動力たるガルド・ナショナルの兵員は、コンミューンの本來何たるかを諒解してゐたものではない。勞働階級者の雷同したものも、亦これと同樣であつたことは、當然に想定される。これらの群衆は、然し前記の特殊異常の心理の主體

であり、ひと度その指導者を與へられる時は、これに從つて確定した目標もなしに唯動搖するのである。ヴアンドオム廣場事件はこの動搖に外ならない。

○

パリ・コンミューンの全事實に亘つて詳細に經緯を記したもののうち、イ・ビ・ウォッシバアン米國使節の、『一八六九年より一八七七年に至るフランス滯在一使節の回想錄』二卷がある。外交官としての地位に於ての記錄で、恐らく最も詳細なものと思はれる。殊にコンミューン前後むしろ帝國の終から共和政の確立に至るものであるから、一貫した觀察が與へられる。(Recollections of a Minister to France, 1877. By E. B. Washburne. 2vols. New York. 1889.)

この回想錄は事情の經過に關する敍述を主とし、批判を行ふところが極めて少いのであるが、そのうちに特に目立つのは、第二卷のはじめ第二節に、ボルドオ政府の對策が怠慢であり、その機を逸したために、パリ守備軍が次第に政府を離れ、一部の指導者に從つて續々モンマルトル地區に集結したのが、大きな過誤であると述べてゐることである。前記の兵士等はそのうちにある。そして特殊異常の市民の心理と等しく、彼等も亦見すてられた彼等の守備軍たる自負をもつてゐたのである。

前記メエルヘイムも、リッサガレイも、そのコンミューン史のうちに、三月十八日の暴動が殆んど豫期し得ざる出來事であつたことを記してゐるのは、このウォッシバアンの記すところ、並に兵士の無關知の事實に通じて考へられる事である。殊にリッサガレイは同書第三節「三月十八日」と題するものゝうちに、パリ

市民に突然の驚きを與へたのみでなく、ガルド・ナショナルの中央委員會にも同樣であつたことを述べ、脚註に、三月十八日暴動の時叛亂軍がパリの政權を掌握しようとしたとの說を反駁して、それが虛僞でなくば無知によるものであると記してゐる。

斯くの如くにして三月十八日ヴアンドオム廣場の事件の性格が、何等の豫定の計畫に發したものでなかつたこと、及びこれに關し、當時の活動の主體たるパリ守備軍の所謂「見すてられたる愛國者」が、計畫的な行動に立つて動いたものでなかつたことが、窺はれるのである。

○

ジョルジ・モランの『コンミューン史批判』のうちに、中央委員會を組織する人々は概してパリ市民の名を知らぬ人が多かつたこと、日々その人々の列名がいつの間にか增加したこと、何故にこれらの人々が短時日間に大きな權力を得るに至つたか、彼等の名を勞働者達のうちにどうして知れ渡るやうにしたかなどは、解答に困難であると述べてゐるが、これも亦コンミューン初期の事情に參照されるべきところで、同時に上記し來つたところに照應されるべきことである。

マドレエヌ寺院司祭ラマズウの前記の書には、七十九人の指導者の職業の別を、數であげて比較してある。そのうち著しく多く他の職業者の數倍のものは、實にジャーナリストであることが注意される。そしてこれにもまして注意されることは、モランが主たる人々の名をあげて、多くが外國人であることを指摘してゐることである。必しもこの兩者の解說が妥當であるとは言い難いと思はれるが、しかもこの間に掬みとら

れるものは、コンミューンの性質ことにヴァンドオム廣場事件に至る事態の性質に參照されることである。

帝國時代末期に於ける勞働運動の主唱者にして、ロンドン派遣後のインタナショナルのフランス代表であつたトオランの名は、全く見當らない。彼の援助者であつたヴァルランの名が、僅かにコンミューン政府布告署名に見えるだけである（メエルヘイム著書附錄文獻）。結局これらは所謂議會的帝政、オリヴィエ一八六九年內閣施政とともに、コンミューンの素地を作つたものであり、コンミューンそれ自體、ましてその初期の暴動に關するものではない。

モランの記すところでは、コンミューン指導者の中樞はラウル・リゴオルであり、彼は「ブランキの第一のそして主要の門弟である。」これに對するものはシャルル・デレクリュスで、ともに文筆の人である。中央委員會員のうちに、革命軍を指揮したクリュズレに關しては、諸文獻に審でない。この人物が由來疑問の人であり、ビスマルクとの交際內諜なども說かれてゐるが、モランの書に由つても、彼に對する不信が委員のうちに存したことが明かである。司祭ラマズウの書に引用してある當時のロンドン・タイムズの記事は、彼等指導者間に於ける不調和を述べてゐる。これらは皆中央委員會の性質、從つてコンミューン當初の形勢の、觀察に資するところが多い。言ふまでもなく、リゴオルといひデレクリュスといひ、ともに純眞な思想家であり、高い理想者であり、決して昔のデムウランの如き人でなかつたことは明かである。彼等が果して、後日の如きバリカアドの死の運命に至るべきものを、當初から懷いてゐたか否かは疑はしい。

○

モランの言ふやうに、「三月十八日ヴアンドオム廣場の暴動は、新共和政府の希望を一擧に碎いた」ものであつた。然しこの日既に形勢は左右し難いものであること、即ちティエール政府の權威を認めずその命令に服しないことが、明白になつてゐた。言ひ換れば、充分に新政府の過失であることが、かの七月革命の場合と同樣に武器回收などに於て存したのである。唯それがこの日の偶々の暴動に發展するとは、前記の如くガルド・ナショナル中央委員會にさへも豫想されなかつた。

しかもウォッシバアンの言ふやうな新政府の對策の無能力や、敵軍のパリ進擊に對する困迷の狀態は、これより先きティエールが內閣會議に於て述べた言葉に親はれるであらう。實に所謂「恐怖すべき歲」の語はこゝに思出される。「吾々は今やこの日頃、すべての事項を冒險しなければならない。どうでもかうでも進んで行かねばならない」といふことである（メエルヘイム前揭同書）。

三月十八日、この政府のやゝ威脅的な宣言に會して、「大砲の運搬に反對したのは婦人達であつた。包圍戰の硝烟にやけた彼女等は、今また不運の二重の分與をうけようとする。彼女等は兵士等に向つて、防戰の過去を顧みてそれが今は恥づべきことであることを戒しめる。兵士等は返す言葉もない。士官は婦人達に話しかける。寒さと空腹とに苦しむ兵士等は、早曉から何の給與もなしに只進軍してゐた。婦人等は食物と酒とを兵士に配布する。街上には集合の合圖の鼓が鳴る。寺院の鐘も聞える。八時頃、凡そ三百人程の士官が集つて忽ち叫び出した。クウデタがあるぞと。」（同前）

三月一日ドイツ軍入城以前に、ガルド・ナショナルの中央委員會が、ド・ラ・コルドリイ街に於て秘かに

成立したと言はれるが、その時期については詳でない。然しこのガルド・ナショナルは、敵軍入場に際しパリを脱退したものゝ殘りで、それに失業者などが多く加はり、烏合の衆となつた。然しまた、彼等は籠城の苦難の間に最後の血戰を覺悟したことを忘れない。その上この歳二月、政府は宣言して、あくまで城を守り決して降伏すべからずと稱してゐたのである。兵士等と市民との興奮の眼前に、ボルドオ政府の設立が、いかに映じたかは想像に餘りがある。私の言ふ特殊異常の心理狀態が、虛無的な思想を加へて、一觸即發の機を見出したのはこの時である。

メエルヘイムは前掲同書に、ある思慮あるフランス人の言として、革命的な行動が既に慣習的なものとなつてゐたことを記してゐる。曰く、「一つの疾病、特にフランス的なるもの。偷安の、そして修辭的なる疾病である」と。ヴアンドオム廣場の事件は、敗戰に困惑した新共和政府の無權力が、パリ守備軍及び市民の異常の心理の上に乘つたもので、まことに不幸な歷史である。